一方、ソロライダーは、全体のチーム数が昨年より減少する中、微増であったのは、将来に希望が持てた。

彼らは他の24時間にもエントリーしている強者だが、他の大会が無くなる中、この大会が今年開催されなかったら、日本のMTBイベントの灯が消えるとも言っていた。常人と違う感性とは言え貴重な意見と思い、超常連の彼らの要望、固定ゼッケン化を聞くことにした。しかしそこに割って入ったのが、初参加ライダーであった。が、ペース配分を見ると面白い。その新人ライダーは最初飛び出したものの後半は沈んでしまい、ミスター24耐にも抜かれ、結果ソロ1位:#102 足立磨砂幸(3連覇達成)、2位:#101 橋立一秀(全大会参加)、3位:#105 北島寛大(期待の新人)の順となった。

また24時間の完走って何だろう？と言う素朴な疑問から生まれたのがボーダー賞。トップチームの周回数を基準に、70%と50%で区切ってあり、レース志向のチームと、エンジョイ志向のチームの目安になればとしているが、ソロライダーが70%をクリアしており、全体のレベルがエンジョイ志向に傾いているのがここにも表れている。

そのボーダー賞70%に絡んだのが、超常連チームの「塚屋」と「ZERO to TOP」。そのチーム代表が、「30回と言わず36回、40回と続けてくれ！」や、「松原湖オートキャンプ場はMTB耐久レースの聖地と思っている！」など、暖かいエールを贈ってくれた。

ハーフタイムセレモニーは、車のヘッドライトで照らしたサッカーのゴール前の簡易ステージで行なった。7時間の表彰を24時間と一緒にしたため、サブメニューの審査発表となったが、全チームがグラウンドに揃っていることもあって仮装コンテストの格好で集まってもらい、何だかコミケのナイト撮影会の様相に！？そのこぼれ話だが、キャンプを楽しんでいた子供から女装のライダーとのツーショット写真をせがまれる場面もあった。ギャラリーがいるのも悪くない！！

ミッドナイトクイズで“エイトナインFM(注)”の聴取率調査をしながら、サンライズトロフィーを迎え、残り4時間弱となる。実は前日の豪雨でピットエリアの一部には水が最後まで浮いている状態で、朝日を浴びる八ヶ岳を望むコース西端部のパターゴルフエリアは、そこだけ霧が発生していて、走行中のライダーから寝ぼけ眼の仲間に、「不思議な風景だから見に行け！」と声がかかっていた！？

(注:24耐では必須アイテム)

チェッカーフラッグを全チームが受けたのは午前9時27分過ぎ。何とチェンが切れるメカトラで愛車を押してのフィニッシュ。そして地球の自転の長さの戦いがやっと終了。小海町提供、高原野菜の詰め合わせの景品を副町長が並べて下さるハプニングもありつつ、表彰式が進み、最後の集合写真は「来年も参加するぞ、オー！」の掛け声で24＋1回目の大会は幕を閉じました。

告知遅れを心配して下さった超常連チームの皆様、そしてコースオーナーの小海町開発公社や地元小海町には感謝に絶えません。また、有形無形のご理解を頂いた関係者の方々ありがとうございました。大袈裟かも知れませんが日本のMTBの灯を守る意味でも継続開催を模索します。

(文責:いしまるひであき)

24＋6＝30回への羅針盤！？

自治体等が主催するイベントサイクリングが隆盛ですが、「サイクリングとは、レースを含むスポーツサイクリング全般」とする世界基準とは隔絶の感があります。今回準備が遅れた理由は正にそれで、“走り出したら自己責任”や“時には参加者、時にはスタッフ”が通じない状況になりつつあります。しかし、サイクリスト目線の自転車走行環境整備は日本の未来に寄与すると確信しており、『クローズド＆オープン』をコンセプトにした企画を、硬軟両面から進めたいと考えています。(続く)